

日本近世初期における渡来朝鮮人の研究：加賀藩を中心に

著者	鶴園 裕, 笠井 純一, 中野 節子, 片倉 穰
著者別表示	Tsuruzono Yutaka, Kasai Junichi, Nakano Setsuko, Katakura Minoru
雑誌名	平成2(1990)年度 科学研究費補助金 一般研究(B) 研究成果報告書
ページ	200p.+ Appendix document 22p.
発行年	1991-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/45832



都府県別アンケート調査の結果一覧

アンケート依頼文(例)

1989年8月10日

金沢大学教養部朝鮮文化研究室
鶴園 裕

金沢大学教養部歴史学研究室
片倉 稷

拝啓

盛夏の候、益々御清祥の段お慶び申し上げます。

さて私共の研究室では、文部省科学研究費の助成を得て、「近世初期における渡来朝鮮人」に関する共同研究に取り組んでおりますが、本年度は文禄・慶長の役(1592~1598)において捕虜となり、日本列島内に残留を余儀なくされた朝鮮人達が、各藩領・各地域で近世的な「秩序」に如何に組み込まれていったのか、概括的な調査研究を行ないたく存じております。

つきましては、御繁忙の折、まことに恐縮ではございますが、貴県内の「近世初期渡来(被虜)朝鮮人」に関わる研究書・研究論文、或いは公刊された史料等がございましたら、是非ともご紹介・ご教示を賜りたく、よろしく願い申し上げます。

本来ならば直接貴館に参上致しましてご教示を乞うべきところ、調査範囲が広域にわたります為、とりあえず書中を以てお尋ね申し上げます次第でございます。失礼の段、何卒お許し下さいますと、別紙等にて御返事下さいますれば、有難き幸せでございます。以上、お願いまで申し上げます。末筆ながら、貴館益々の御清栄を心からお祈り申し上げます。敬具

アンケート書式

◆下記につきまして、ご回答下さるようお願いいたします。

◇ 貴県(都・府・地域)内の近世初期渡来(被虜)朝鮮人について

A. 存在した。

B. 存在したと聞いていない。

◆Aの場合、下記項目につきましても御教示下されば幸甚です。

1. 貴県(都・府・地域)内における、初期渡来(被虜)朝鮮人について
(氏名・身分・没年等、簡単に記して下さい。)
2. 1に関する研究書・論文等について。
(著者・タイトル・刊行所・雑誌名など、概略を記して下さい。)
3. 1に関する公刊史料について
(編者・タイトル・刊行所・雑誌名など、概略を記して下さい。
未公刊史料につきましても、所蔵者等をご教示願えれば望外の幸せです。)
4. その他(お気づきの点がございましたら、ご教示下さいますようお願いいたします。)

アンケート結果一覧

1. 青森県立図書館（青森市新町2丁目4番30号）

存	否	存在したと聞いていない。
---	---	--------------

2. 岩手県立図書館（盛岡市内丸1番50号）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	漂流・漂着についての記録がありますので、『岩手県立図書館郷土資目録（和本の部）』より、該当部分のコピーを送付しますので参考として下さい。

3. 宮城県立図書館奉仕課調査相談係（仙台市宮城野区榴ヶ岡5番地）

存	否	存在した。
1	氏名等	氏名：不明。墓のある桃生郡鳴瀬町の山岡院（現在は廃寺）の享保17年の書出には、高麗氏とあり、土地の人はくコマシ>と呼んでいるようです。法名は山岡院空源妙蘊大姉。 身分：不明。相当の階層の出身であろうと推定されています。 没年：上記の書出によれば、寛永19年。
2	論文等	石尾美代子『山岡院由来記』（『瑞巖寺博物館年報』9.昭58.松島町瑞巖寺博物館刊） 1の書出を基にしてく高麗氏>の仙台藩における役割や影響等を論じたもの。
3	史料等	2に同じ。
4	その他	仙台藩に伝わった「切米きりめ焼」は、伊達政宗が朝鮮から連れてきた陶工が始めたものだという言い伝えがあるが、根拠を示すものはなく、現在は否定的な論が多い。

4. 秋田県立図書館（秋田市千秋明德2-52）

存	否	存在した。
1	氏名等	当館所蔵の佐竹文庫にある『国典類抄』前編雑部21、及び後編雑部31に関係記録が抄録されています。『国典類抄』の概説は別紙（複写）をご参照ください ※前編雑部21「琉球朝鮮阿蘭陀人等来朝之次第」 前編雑部31「琉球人朝鮮人阿蘭陀人等来朝」
2	論文等	現在のところ、該当する研究書・論文等はありません。
3	史料等	『国典類抄』第18巻 雑部（一）p672～724 『国典類抄』第19巻 雑部（二）p925～974 ※『国典類抄』の翻刻計画については、当館報の関係記事掲載号を添付しました。どうぞご参照ください。 ※該史料は、マイクロfilm複製され、東京・雄松堂から販売されています。
4	その他	後日、ご来館のうえ調査される場合は、改めて電話、あるいは文書でお申し出ください。原本の特別閲覧、写真撮影等の依頼は、文書でお申し出ください。

5. 山形県立図書館（山形市七日町3丁目1番23号）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	県史ほか本館資料を調査しましたが、該当文献は見当りませんでした。なお、県内の図書館・専門家（郷土史家）等にも照会しましたが、わからないという回答でした。

6. 福島県立図書館調査課郷土資料係（福島市森合字西養山1）

存	否	不明。
2	論文等	『福島史学研究』『会津史談』『歴史春秋』『福大史学』等調査いたしましたが、関係論文は発表されていません。
3	史料等	未公刊史料（文書類）については、福島県歴史資料館（☎960 福島市春日町5-54）にも御照会下さい。
4	その他	御参考までに『福島市史1』（福島市教育委員会、昭45）p182-183, 212、『福島県史1』（福島県、昭44）p280-281のコピーを同封いたしましたので、御参照願います。

7-1. 茨城県立図書館館内奉仕課（水戸市三の丸1-5-56）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	当館所蔵の資料のなかには見当たりませんが、各市町史にたずさわってられる茨城県立歴史館の研究委員にご照会になれば、何かわかるかも知れません。

7-2. 茨城県立歴史館県史編纂室（水戸市緑町2-1-15）

存	否	該当なし。
---	---	-------

8. 栃木県立図書館調査相談課（宇都宮市埴田1-3-23）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	館の資料では見あたらず、文書館の方にも聞きましたところ、ご依頼の資料はないということでした。

9. 群馬県立図書館調査相談・群馬資料室（前橋市日吉町1丁目14-8）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	自館には「近世初期渡来（被虜）朝鮮人」に関わる史料はありませんでした。又、群馬県史編纂室の中世、近世担当の各専門員にも問い合わせましたが、そのような人が存在したとは聞いていないということでした。

10. 埼玉県立浦和図書館（浦和市高砂3-1-22）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	当県、県史編纂室にも確認しましたが、該当はないとのことでした。

11. 千葉県立中央図書館郷土資料室（千葉市市場町11番1号）

存	否	存在したと聞いていない。
2	論文等	千葉県関係の各文献をあたってみました。研究書及び論文等は当図書館所蔵本ではありませんでした。

12. 東京都立中央図書館資料部参考課東京室（東京都港区南麻布5丁目7番13号）

存	否	不明。
4	その他	<p>江戸市中に近世初期渡来（被虜）朝鮮人が存在したか否かについて。この点について触れた図書資料は、調査した限りは見当たらず、結局不明でした。（ただし雑誌論文については調査していません。悪しからずご了承ください）</p> <p>若干の関連事項が次の資料の朝鮮使節来江戸事蹟の中に載っていましたのでご参考までに記しておきます。</p> <p>①『東京市史稿市街篇第三』昭和3年東京市刊（請求番号0920-T727-T2-2-3）</p> <p>②『東京市史稿産業篇第三』昭和16年東京市刊（請求番号0920-T727-T2-5-3）</p> <p>①のp.351-2(出典 台徳院殿御實記)</p> <p>慶長12年5月11日に、幕府側から朝鮮信使側に対し、返簡をさずけ、その中で『文禄の役、彼国人の俘囚せられしもの、その心にしがい帰国の願するものは、放ちかへさる旨を達した』とあり、13日に江戸を発し、帰国の途につくが、さらに20日の条に『彼国の俘囚数百人、こたびの聘使に附して帰国せしめらる。かれ等歡抃かぎりなし』とあります。（ただし、この俘囚数百人が、どの地にいたかは記述されていません）</p> <p>②のp.713(出典 異國日記。坂上池院日記。大猷院殿御實記卷三)</p> <p>寛永元年12月22日に、幕府側から朝鮮信使に対し返簡をさずけ、その中で、『さきに生獲の韓人は皆帰国せしむ。たまたまのこり留どまるものは、永く本邦の民たらん事を願ひ、帰国の事を思はざれば、しいてかへしがたき旨をのせけるとぞ。』とあります。</p>

13. 神奈川県立文化資料館郷土資料課（横浜市西区緑ヶ丘9番地の3）

存	否	存在したと聞いていない。
---	---	--------------

14. 新潟県立図書館（新潟市一番堀通町5923-39）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	所蔵資料を逐一あたってみました。残念ながら該当する資料はありませんでした。

15. 富山県立郷土博物館（富山県本丸1-62）

存	否	存在したと聞いていない。
---	---	--------------

16. 福井県史編纂室（福井市城東1-18-21 福井県立図書館内）

存	否	存在したと聞いていない。
---	---	--------------

17. **山梨**県立図書館郷土資料担当係（甲府市丸の内2-33-1）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	当館所蔵の資料中には、近世初期の渡来人に関するものではありません。また県内の近世史研究者にも問い合わせましたが、関係資料は今までのところ見たことがないとの事です。

18. **長野**県立図書館（長野市若里 298番地）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	このことについて本県では存在した記録資料はありません。朝鮮出陣に触れた記事は信濃史料にあります。（文禄元年）

19-1. **岐阜**県立図書館（岐阜市大宮1-46）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	残念ですが、当館所蔵資料からは、おたずねの件について記載しているものが見出せませんでした。 県の資料館（岐阜県歴史資料館）へは、すでにおたずねになっておられるかと思いますがもしまだでしたら、直接ご照会になって下さい。

19-2. **岐阜**県歴史資料館資料課（岐阜市夕陽ヶ丘4）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	関係文書がありませんので申し訳ありません。

20. **静岡**県立中央図書館資料課（静岡市谷田620）

存	否	存在した。
1	氏名等	◇徳川家康が、1605年、李朝と国交を回復した折、俘虜男女1240余人を送還したが、この中に県内居住の者がいたかもしれない。 家康の側室の一人「おたあジュリア」は戦災孤児の一人で貴族の出身だといわれる。 また、家康の侍臣となり食祿を与えられていた允福とか、後に久能山東照宮の造宮に当たった木工・銅工等の技術者がいた。駿河版関係の技術者がいたかもしれない。 ◇家康は、藤枝市の田中城に狩りに来て、そこで鯛の天ぷらを食べたのが命とりになり、駿府城にうつされて死んだということになっているが、良知家で発病している。この良知家は江戸初期よりの家系で、朝鮮系かもしれない。
2	論文等	『韓来文化と其の事蹟—東海地方』（李沂東著、韓国資料研究所発行、昭和39年）小野則秋「徳川家康の文献政策とその影響」（駿河文庫と駿河版について）（『仏教大学研究紀要』57号、昭和48年3月）

21. 愛知県文化会館愛知図書館郷土室（名古屋市東区東桜1-12-1）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	このことについて記載された資料は、当館にはありませんので御了承下さい。 なお、調査資料を列举します。 『文禄・慶長の役』『加藤清正—その人間と治蹟』『加藤清正伝』『朝鮮通信使の道をゆく』（その他当館所蔵資料）

22. 三重県立図書館（津市広明町147番地-2）

存	否	存在した。
1	氏名等	栗本與三右衛門（出身地：慶尚南道熊川／原名：不明／没年：不明） 藤堂高虎公の士に文禄2年召出されて60石を給せられた。與三右衛門の長子武左衛門は後に久居附になって200石に加増せられ、次男権太夫は津藩に仕えて後に300石になり、その権太夫の家は長男権右衛門(200石)、次男八右衛門(100石)の二家に分れた。
2	論文等	学仙堂蒙叟「阿古木の藻屑 12 津藩士中の外国種」（『安濃津郷土会誌』8号昭和14）

23. 滋賀県立図書館（大津市瀬田南大萱町1740-1） 未回答

24. 京都府立図書館（京都市左京区岡崎成勝寺9番地）

存	否	存在した。
1	氏名等	姜沆 <small>きやうこう</small> 朱子学者。『看羊録』の著者。没年：光海戊辰卒す（『朝鮮人名辞書』朝鮮総督府中枢院編、臨川書店昭和51年復刻版により没年確認）
2	論文等	『日記・記録による日本歴史叢書 近世編4 朝鮮日々記・高麗日記—秀吉の朝鮮侵略とその歴史的告発（北島万次著）』そして、1985 『耳塚—秀吉の鼻斬り耳斬りをめぐって』琴秉洞著 二月社、1978 ※上記資料は京都府内における被虜の資料ではなく、一般的な資料です。

25. 大阪府立中之島図書館郷土資料室（大阪市北区中之島1丁目2番10号）

存	否	存在した。
1	氏名等	『文禄・慶長役における被擄人の研究』に紹介されている『河内屋可正旧記』の「ナマリ千代」
2	論文等	不明。
3	史料等	不明。
4	その他	当館の蔵書の中には『文禄・慶長役における被擄人の研究』に載っている資料以外のものは見出せません。ただ、『秀吉の侵略と大阪城—ちょっと待て「大阪築城400年まつり」』（辛基秀・柏井宏之編、第三書館、1983年発行）という本は載っていないようですので、ご参考までに目次のコピーをお送りします。ご活用下さい。

26. 兵庫県立図書館調査相談課（明石市明石公園1番27号）

存	否	不明。
4	その他	<p>当館の所蔵資料の中には、兵庫県の近世初期朝鮮人についての記述はみあたりません。主な参考資料は次のとおりです。</p> <p>『兵庫県史 3巻』 兵庫県史編集専門委員会 兵庫県 昭和53年</p> <p>『兵庫と朝鮮人』 在日本朝鮮人科学者協会兵庫支部兵庫朝鮮関係研究会編集 金 周煥（兵庫県伊丹市中村井ノ下384）1985</p> <p>この資料の「はじめに」には次のような記述があります。</p> <p>「一九〇三（明治三十六年）に八名の朝鮮人が県下に住むようになったと記録にある（兵庫県統計書）が、このように二十世紀の初めごろから兵庫に同胞が住むようになった。」</p> <p>ご参考までに次の機関を紹介します。</p> <p>「錦繡文庫」（カマガキ）朝鮮関係図書を中心に一万数千冊を収蔵し公開。</p> <p>☎661 尼崎市名神町 1丁目12番地（尼産ビル 5階）TEL06-429-5101</p>

27. 奈良県立図書館（奈良市登大路町）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	<p>いろいろと調べてみましたが、本県内での近世初期渡来（被虜）朝鮮人に関する文献はあいにく見つかりませんでした。</p>

28. 和歌山県立図書館奉仕第一課（和歌山市1番丁1番地）

存	否	存在した。
1	氏名等	<p>当館所蔵の資料では、李梅溪父子のほかは見当りません。</p> <p>◇李一恕 字は真栄。卜筮及び儒学を業とし、頼宣公に仕える。没年：寛永10年。63歳。</p> <p>◇李梅溪 名は全真。字は衡正。一恕の長子。父の業を嗣いで儒員として頼宣公に仕える。没年：天和2年。66歳。</p> <p>◇李立卓 名は以中。字は三達。一恕の次子。医を以て松平頼純侯に仕う。没年：元禄9年。76歳。</p> <p>以上、貴志康親著『紀州郷土芸術家小伝』（国書刊行会、昭和50年刊）</p>
2	論文等	<p>当館所蔵の資料</p> <p>◇平岡繁一著『紀州藩儒者、李梅溪父子資料』上（自刊、昭和60年） 下巻は所蔵せず。</p> <p>◇梅溪公顕彰の会『梅溪公顕彰記念の誌』（和歌山韓国教育文化センター刊 S51） 顕彰碑建立の際の資料。</p> <p>雑誌・紀要には記載がありません。</p>

29. 鳥取県立図書館管内奉仕係（鳥取市西町3丁目202）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	<p>近世資料は博物館の方で所蔵しておりますので、照会いたしましたが、漂流した人はあるようですが、被虜朝鮮人については聞いていないとのことでした。</p>

30. 島根県立図書館郷土資料室（松江市内中原町52番地）

存	否	存在した。
1	氏名等	◇李郎子：慶長2年、津和野城主吉見頼之（毛利元就軍）の捕虜。福川三の瀬城主斎藤市左衛門に預けらる。斎藤、杉ヶ峠近辺に居地を付与（のち、唐人屋と称する）。和名を又左衛門と名乗り、焼物を焼く。明和の頃、お庭焼の御用（藩窯）となる（唐人焼）。一代にして滅びる（播州赤穂浪士・武林唯七の祖父・武林唯右衛門＝慶長3年浅野幸長の捕虜となった武林降王、の部下）。夫婦の墓標あり（掃一久賀禪定門靈位／又右衛門／寛文未年六月八日。掃貞貞円信女靈位／妻／宝永五歳子二月十七日）。 ◇李陶仙・金陶仁：長浜の永見近江守氏隆の捕虜（陶工）。内田村（美川村字内田）で陶器を焼く。死後、釉薬をかけて焼く方法が分からなくなった。
2	論文等	伊藤菊之輔著刊『山陰の陶窯』（昭和44年）
3	史料等	『吉賀記』（鹿足郡の古文書）

31. 岡山大学附属図書館情報サービス課参考調査係（岡山市津島中3丁目1番1号）

存	否	存在したと聞いていない。
2	論文等	西川宏『岡山と朝鮮』[岡山文庫 101]（日本文教出版KK刊）

32-1. 広島県立図書館（広島市中区千田町3丁目7番47号）

存	否	存在したと聞いていない。

32-2. 広島市立中央図書館（広島市中区基町3番1号）

存	否	不明。
4	その他	当館の所蔵資料にはみあたりません。なお、古文書等の原資料は、そのほとんどを原爆で焼失しております。

33. 山口県立山口図書館（山口市大字後河原字松柄 150-1）

存	否	存在した。
1	氏名等	李勺光・坂高麗左衛門、他。
2	論文等	萩焼関係：檜崎鐵香著『はぎやき』（盛運堂、昭和18年刊） 山本勉弥著・森森豊増補『萩の陶磁器』（森森豊彦発行、昭和53年刊） 山口県立美術館『古萩 その源流と周辺』（図録、昭和56年刊） 『山口県地方史関係文献目録』Ⅰ・Ⅱ 文化財の項 関連文献（論文）： 布引敏雄「『陰徳記』の日朝会話集について一文禄慶長の役における日本軍の暴虐」（『山口県地方史研究』51号、84年6月） 岸浩「長門北浦に漂着した朝鮮船の記録」（『同上』53号、85年6月） 岸浩「長門北浦に漂着した朝鮮人の送還—唐人送り」（『同上』54号、85年10月）
4	その他	萩藩毛利氏関係資料につきましては、山口県文書館（山口市後河原松柄150-1）で所蔵しておりますので申し添えます。

34. 徳島県立図書館参考奉仕係（徳島市徳島町城ノ内1）

存	否	存在した。
1	氏名等	朝鮮女の墓：川島町古城山道閑原にあり。口碑によれば林道感文禄元年朝鮮征伐に従軍の砌捕へ帰り後病死せしを葬れりと伝ふ（『麻植郡郷土誌』）。川島城跡には朝鮮女の墓が建立されているが、林道感も蜂須賀家政に従って朝鮮に出陣したこと上記のごとくで、帰国に際して連れ帰ったものごとく、遠く離れた異域の地で、時には望郷の念にかられつつ淋しく生涯を終わった異邦人である（『川島町史』上巻）。 韓人墓：文禄中朝鮮の役韓人三人を獲、之を仁木又五郎に賜ふ死して此に葬る（『阿波誌』）。
2	論文等	久保忠男著『麻植郡郷土誌』（大正6年刊） 川島町編『川島町史』上巻（昭和54年刊） 笠井藍水訳『阿波誌』（昭和51年刊）
4	その他	川島町の郷土史家にも問合せをしたが、詳しい事はわからないとの返事でした。

35. 香川県・高松市立図書館（高松市松島町1丁目15-1）

存	否	存在した。
1	氏名等	大添・小添：朝鮮官女の姉妹。文禄の役に、生駒氏の臣、高岡（のち山崎）城左衛門宗弼（長峰城主）の捕虜。秀吉に献上⇒生駒近規に授く⇒高岡城左衛門に預く。高岡氏により埋葬され、山崎・渡辺家墓所に小五輪塔残る（『三木町史』）。 唐人塚：飯田町田中にあり。文禄の役捕虜8人（医者 ^{からと} の家族）がここに配置され、唐戸資宗（生駒公の臣）が監督に当たったが、彼等は煙管で自殺した。唐戸は食禄を没収。土地の人が哀れんで墓を建てたと伝える。墓は400余年、唐戸氏によって守られた。讃岐名勝図会・弦打村誌には、朝鮮人捕虜の墓ではなく、「唐人 ^{からと} 家」の墓だという。また、飯田町小坂にも「唐人塚」と呼ばれる塚があり、郷土であった久左衛門等村人の世話を受けた唐人の墓と伝える（『弦打風土記』）。
2	論文等	三木町史編集委員会編『三木町史』（三木町、昭和63年） 高松市立弦打小学校PTA編『弦打風土記』（同PTA、昭和44年）

36. 愛媛県立図書館（松山市堀之内愛媛教育会館内）

存	否	存在した。
1	氏名等	姜沆（姜睡隱）。李朝時代中期の儒者。1567～1618。
2	論文等	『伊予史談』58号（昭和4年発行、伊予史談会） 愛媛新聞社編『愛媛県百科大事典』上（昭和60年 同新聞社） 愛媛県史編纂委員会編『愛媛県編年史』5（昭和44年 愛媛県）
3	史料等	『姜沆大津幽囚中之記』（長山源雄編写『伊予資料叢書 5 昭和10年代）

37. 高知県立図書館郷土資料班長・広谷喜十郎氏（高知市丸の内1の1の10）

存	否	存在した。
1	氏名等	朴好仁、他30名。長曾我部元親の捕虜。山内氏入国後に「唐人町」に居住。好仁は表口8間、裏行8間半の屋敷を拝領。藩主一豊から町役免除を受ける。その他の人々も無年貢の屋敷を支給され、68座の豆腐専売の特権を受けた。好仁は伊予の加藤嘉明の所へ身を寄せ、さらに広島の福島正則に保護された。元和3年二子連れて朝鮮通信使とともに帰国。高知には長男が残り、長次郎と名を改めた。元禄16年、秋月姓を名乗ることを許された。
2	論文等	広谷喜十郎「文化の連鎖 47 朝鮮文化とのつながり」（高知新聞）
3	史料等	高知県文教協会『南路志（上）』（昭和34年刊）

38. 福岡県立図書館郷土課（福岡市東区箱崎1丁目41番12号）

存	否	存在したと伝えられている。
1	氏名等	1) 八山 <small>やさん</small> （高取八蔵重貞）〔?～承応3（1654）：『高取家文書』による〕文禄年間、黒田長政に従って帰化し、高取焼の創始者となったと伝えられる。（『陶磁大系』第15巻、上野・高取より） 2) 尊楷〔?～承応3（1654）：『豊前上野焼研究』による〕慶長三年前後、加藤清正に従って帰化。当初は唐津領内に滞在し、後、細川忠興の小倉入城とともに招かれ、上野焼の開祖となったと伝えられる。（『陶磁大系』第15巻、上野・高取より） 3) 李東成〔?〕朝鮮の役の折、問注所統景が連れ帰り、一の瀬焼の開祖となったという説あり。ただし、他説もあり、定説となっていない。（『九州の工芸地図』、『浮羽町史』上より）
2	論文等	1)・2) ①『陶磁大系』第15巻、上野・高取／永竹威著／平凡社／S50刊 ②『陶器全集』第21巻、萩・上野・高取・薩摩／佐藤進三編／平凡社/S36刊 ③『大名茶陶 高取・上野・八代』／朝日新聞西部本社編刊／S56刊 ④『上野古窯調査報告書』／梅沢彦太郎編／日本陶磁協会 ⑤『古高取山田窯』／栃内禮次稿／S11刊 ⑥『豊前上野焼研究』／井上圓蔵著／国書刊行会／S56刊 ⑦『茶會記に現れたる上野焼』／美和彌之助／国書刊行会／S56刊 3) ①『浮羽町史』上／浮羽町／S63刊 ②『九州の工芸地図』／後藤実一／葦書房／S54刊
3	史料等	1) 『高取家文書』／高取静山編／雄山閣／S54刊 『筑前国統風土記』／貝原益軒編／文献出版／S63刊 『福岡藩民政誌略』（『福岡縣史資料』第一輯）福岡縣／S7刊 2) 『豊前上野焼研究』／井上圓蔵著／国書刊行会／S56刊 （研究書ですが、関係史料も収録されています）
4	その他	陶芸関係以外の研究・史料は、見当りませんでしたので、ご了承ください。

39. 佐賀県・名護屋城跡調査研究室（佐賀市城内1-1-59 佐賀県教育委員会内）

存	否	存在した。
1	氏名等	李宗欽（川崎清蔵） 天正15 筑前黒崎に漂着、天正19 佐賀城下の唐人町に居住、十人扶持、貿易事業に当る 宗伝（深海新太郎） 武雄内田に築窯、文禄の役時の被虜人、元和4（1618）没 百婆仙 宗伝の妻、文禄の役時の被虜人、有田稗古場に築窯、明暦2（1656）没、96歳 秦伯・文烈（林一徳斎） 医師？、文禄の役時の被虜人、佐賀藩で知行 220石、慶長12（1607）没 林利兵衛貞正・栄久 林一徳斎の子、医師？、寛永6（1629）没 洪浩然 晋州の人、儒学者、文禄の役時の被虜人、佐賀藩で知行 100石、明暦3（1657）殉死 暁月浄雲 金立熊山の陶工、慶長の役時の被虜人、寛永5（1628）没 九山道清 医師？、鍋島更紗の始祖、慶長の役時の被虜人、正保4（1647）没、80歳 李参平（金ヶ江三兵衛） 有田皿山の陶石の発見者？、慶長の役時の被虜人、明暦元（1655）没
2	論文等	東中川忠美「肥前における近世の大甕」（『東アジアの考古と歴史』下、昭和61年） 佐賀県立博物館『鍋島更紗・緞通展』（同館、昭和52年）

40-1. 長崎県・平戸市立図書館（平戸市戸石川町 482-1）

存	否	存在した。
3	史料等	松浦静山の『甲子夜話』に記事がある程度である。 平戸図書館には、長崎県立図書館のコピーしかありません。
4	その他	松浦史料館にも松浦藩の資料が残っていると思われますので、そらちにも尋ねられたらいかがでしょうか。

40-2. 長崎県・財団法人松浦史料博物館（平戸市鏡川町12）

存	否	存在した。
1	氏名等	豊臣秀吉の朝鮮の役に出陣した松浦家第26代松浦鎮信（法印）は、慶長3年（1598）帰国するに当って、陶工を含む朝鮮人男女 100余名を連れ帰り、平戸大膳原の一角に居住させて、この地を高麗町と称した。 ◇巨関：平戸藩主より今村姓を拝領し、藩籍に入られた。平戸中野焼の創始者。 ◇高麗媼 <small>（名は髪えん）</small> ：平戸の里人、中里茂右衛門に嫁す。平戸中野焼の創始者。寛文12年（1672）106歳にて没。戒名、専念妙西大姉。
2	論文等	深瀧久著『長崎女人伝（上下）』（西日本新聞社、昭和55年） 野田敏雄著『肥前平戸焼読本』（創樹社美術出版、平成1年） 中島浩氣著『肥前陶磁史考』（青潮社、昭和60年）
3	史料等	未公刊史料 松浦史料博物館所蔵文書 ◇三河内皿山今村三之丞家伝（合綴本）1冊／◇今村家記録“むかしの儘”1冊／◇三河内陶工今村正芳旧記（合綴本）1冊

41. 熊本県立図書館資料課県資料係（熊本市出水2丁目5番1号）

存	否	存在した。
1	氏名等	<p>①尊楷（上野<small>あかの</small> 喜蔵） 陶工で上野焼の祖。釜山周辺の城主の嫡子。上野家の先祖附あり。</p> <p>②日遥 本妙寺の僧。明朝の神宗皇帝万暦9年生。万治2年2月26日没。朝鮮慶尚道河東の人。余壽禧字天甲の子。</p> <p>③道慶・慶春 紙漉工。慶春は鹿本郡川原谷で松山の姓を名のる。道慶は玉名郡木葉村浦田谷で清田又は清成の姓を名のる。</p> <p>④金官 小侍郎長浦鑑といい、朝鮮後宮の財務を司る役をつとめていた。慶長16年6月24日死去の清正を追い、半月程後殉死。</p>
3	史料等	上野焼の先祖附（当館所蔵）。
4	その他	<p>当地における研究書・論文等の刊行についても、今のところ情報をつかんでおりません。また、内藤氏・丸茂氏の図書および論文を当館が所蔵しておらず、調査内容の確認ができませんでした。1にあげました人名は、主に下記の文献より著名なもののみです。</p> <p>清正の朝鮮出兵では、300人程の朝鮮人を連れ帰っているようです。</p> <p>参考文献 ◇『加藤清正』片山丈士著、河出書房、S40年刊 ◇『肥後名僧伝』下田曲水著、熊本県教育会、S2年刊</p>

42. 大分県立大分図書館奉仕課調査相談係（大分市荷揚町3番31号）

存	否	存在したと聞いていない。
4	その他	『大分県史（中世篇Ⅲ）』『増補編年大友史料』『朝鮮日々記』などに記述あり。慶長の役の際の従軍僧の『朝鮮日々記』（臼杵市）安養寺僧慶念：原本安養寺蔵

43. 宮崎県立図書館（宮崎市船塚3丁目210番地1）

存	否	存在した。ただし、伝説である。
1	氏名等	シンニョム、カンニョム。ただし伝説である。 陶工。高橋元種の捕虜。庵川焼の始祖。窯跡は庵川の字皿山田に残る。
2	論文等	『門川町史』p268～269

44. 鹿児島県立図書館（鹿児島市城山町5番1号）

存	否	存在した。
1	氏名等	<p>星山仲次（金海）〔関係窯：帖・加・堅〕 朝鮮星山の陶工。朝鮮征伐の時島津義弘に帰連されて来朝。慶長元年帖佐焼開窯。慶長12年加治木窯開窯。元和6年堅野開窯。元名は金海。星山仲次は帰化名なり。薩摩焼開祖、代々世嗣は仲次と称す。元和7年12月15日、52歳にて歿す。法名法乘運一慶上座。</p> <p>星山彌右衛門（金和）〔加・堅〕 加治木に於て島津義弘の御小姓役を勤む。元和7年堅野に移り父星山仲次の陶業を継ぐ。仲次の長子。天和2年10月、82歳にて歿す。法名星山祐慶居士。</p>

星山休左衛門（金林）〔豎〕

仲次の次子。金和と共に豎野窯に於て製陶に従事す。

星山仲兵衛（金臣）〔豎〕

仲次の裔。寛政5年、藩命により龍門司窯の川原芳工と陶法修行の旅に上り粟田窯の錦光山宗兵衛より京焼・楽焼の法を伝受し、帰りに金焼付を初む。金襴手の創始なり。文政6年3月、59歳にて歿す。仲兵衛は俗称なり。名は八次郎、法名陶良安居士。

星山彌平次〔豎〕

與八、七郎次、共に重豪時代の豎野窯名工。何れも仲次の支流なり。

芳仲〔龍〕 芳珍の異称ならん。その項を見よ。

芳珍〔龍〕

星山仲次と一緒に来朝したる朝鮮人陶工。帖佐焼・加治木焼に仲次と協力して製陶す。

朴平意（興用）〔苗〕

清右衛門、興用の別名あり。朝鮮征伐の際来朝したる者。串木野に開窯す。慶長10年頃苗代川に開窯。同19年白土を領内に発見す。仲次と共に薩摩焼元祖たり。初代苗代川庄屋を勤む。寛永元年5月、65歳にて歿す。

朴貞用〔苗〕

清左衛門ともいふ。平意の子、父に次いで庄屋を勤む。名工なり。

朴龍官〔苗〕

宝暦頃の苗代川名工、主取役を勤む。

朴清智〔苗〕

朴宗仙と共に宝暦頃の名陶工。

朴正官〔苗〕

文政10年藩庁に請ふて、錦手部を設け主取役となる。慶応3年佛国大博覧会に花瓶を出品し好評を博す。嘉永6年磯集成館に招かれ、製陶を伝授す。明治7年6月死去す。錦手改善に努力した恩人なり。

朴利行〔苗〕

陶畫工。正官の子。昭和6年没。

沈當吉〔苗〕

初代帰化朝鮮人陶工。沈家元祖。名工。沈當壽はその子。三代當吉は製陶に巧にして陶一の名を藩主より拝領す。

沈壽官〔苗〕

明治維新の名工。製品に透彫、竹箆やうの花入あり。南京山磁器方主取役となる。明治6年埃国博覧会に大花瓶を出品す。明治10年後の苗代川の衰微を歎き玉光山窯を設け外国輸出に努む。明治39年、72歳にて歿す。その子正彦襲名し現今窯場を経営す。

李庶左衛門（利官）〔苗〕

御飯屋守庄屋役を勤む。名工。

大迫秀明〔苗〕

帰化朝鮮人子孫、平東郷壽勝の窯を引受け陶業経営、錦手無地物を製造す。

嘉入（星山金貞）〔豎〕

星山金林の子、名工。寸古・三島手・片身替・赤焼等島津家蔵帳物多し、慶安より寛文間の人。

嘉碩（星山）〔星〕

延享元年藩主島津継豊の御書院道具役となる。陶業を監督す。

高城元六左衛門〔帖〕

帖佐窯の陶工。後星山仲次と瀬戸法を伝受す。帰化朝鮮人なり。

田原友助〔豎〕

朝鮮人申主碩の帰化名。朝鮮田原の産。田原家元祖。豎野開窯に仲次と協力す。陶工。

田原萬助〔豎〕

友助の弟、申武信の帰化名。豎野窯の名工。

原田次郎左衛門〔豎〕

友助の孫、置物の製造を他国より伝受し、豎野窯の小細工を一変せり。

◇以上、小野賢一郎編『薩摩焼総鑑』昭和9年、「薩摩陶磁器陶工略伝表」より

2	論文等	松田道康「玉山神社、高麗神舞の源流を探して」 （『民俗研究』5号、鹿児島民俗学会、1970年刊、33～41p） 四元幸夫編著『東市来町郷土誌』（東市来町教育委員会、昭和63年刊、435～551p、「陶工の薩摩への渡来」） 串木野市教育委員会編刊『串木野郷土史』（180～187p、「慶長の役とまつ焼」〔串木野窯〕）
3	史料等	苗代川沿革概要 著者不明 写本 17頁（当館蔵）

45. 中系電 県立博物館（那覇市寄宮1丁目2番16号）

存	否	存在した。
1	氏名等	張献功（?～1638） 沖縄に帰化した朝鮮陶工。一六ともいい、和名を仲地麗伸 <small>なにしん</small> と名乗った。尚寧 <small>しょうねい</small> 王は1617年、世子尚豊を通じて薩摩に願い出て、文禄・慶長の役に朝鮮から連れ帰った22姓80余人の男女陶工のうちから、一六・一官・三官の三人を招聘。那覇の湧田 <small>なぐた</small> 村に家屋敷を与えて住まわせ、陶技を伝授させた。王命を受けた張は御用品を製作するなど沖縄陶業界に大きな足跡をのこした。墓は那覇市牧志奈利久保原 <small>なりくほばる</small> にある。 朝鮮式陶法 琉球王府時代、当時のすぐれた朝鮮陶工の渡来によってもたらされた作陶技術のこと。首里王府の要請によって薩摩藩から1617年（尚寧29）に渡来した張（一六）献功・安一官および三官が湧田村において朝鮮式陶法を伝授したことに始まる。これらの陶工は朝鮮の役のさい、薩摩藩が強制招致し、藩内で窯業に従事させていたなかの3人だった。その後さらに、仲村渠致元 <small>なかにだかりちげん</small> （用啓基）が1730年（尚敬18）に薩摩の立野（堅野）、苗代川で薩摩系朝鮮式陶法を直接学び、再び導入した。この二つの経路で伝わった陶法は、これまで主流を占めていた南方系陶法や中国系陶法と混交し消化されて、沖縄独自の伝統的な陶法となった。 （『沖縄大百科事典』、沖縄タイムス社、1983年刊、による）
2	論文等	東恩納寛惇「薩摩傳琉球陶器に就いて」（『三州』昭和2年9月に発表。後『苗代川沿革一陶法ニ関スル史料一』として本人が編集。“高麗人の琉球渡来”の章あり。当館蔵。
3	史料等	『琉球国旧記』（琉球史料叢書） 比嘉朝健「琉球歴代陶工家譜」I～III（『美術研究』49～52、昭和11年1～4月）

〔付記〕本一覧は、近世初期渡来朝鮮人に関する、アンケート調査の結果をまとめたものである。本研究会では1989年8月、全国の都府県立図書館に対して調査用紙を郵送し、回答をお願いした。依頼の文面・アンケートの書式は冒頭に掲げた通りである〔ただし、内藤雋輔著『文禄慶長役における被擄人の研究』（東大出版会、1976年）、および丸茂武重「文禄・慶長の役に於ける朝鮮人抑留に関する資料」（『國史学』61号、1953年）等の先行研究によりその地域の渡来朝鮮人の概略が知られる場合には、その旨を書き添え、近年の研究状況等についての回答をお願いした〕。アンケート調査の結果、多数の貴重な情報を得ることが出来たが、回答を得られなかったり、なお調査の統行を必要とする地域については、1990年夏、更めてその地域の図書館・研究機関等に対し依頼を行なった。ご繁忙の中、煩雑な質問に快くご回答下さった各位に対し、深甚の謝意を表す。また、このアンケート調査実施に関し種々ご教示を賜り、協力を惜しまれなかった、石川県立図書館の香村幸作氏にも、厚く御礼申し上げたい。

なお、本一覧ではアンケートの回答を忠実に引用することに努めたが、紙幅の関係等で、若干表現を改めた場合もある。